

# H<sup>OSTELLING</sup> Magazine



巻頭インタビュー

## 紀里谷 和明

自分自身の「声」を、  
もっと聴こうよ。

Hostelling Magazine **地球の歩き方** www.earthwalk.com

暗い国なんて、過去のもの！ヨーロッパ屈指の観光大国へ  
ポーランド ワルシャワ/クラクフ

📍トリップアドバイザー  
ワルシャワの人気バー&クラブ

Youth Hostel Pick up  
旅人の心の灯台を目指して  
塩狩ヒュッテユースホステル

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





www.yamazakipan.co.jp

おいしいから、  
いつでも一緒。



# ランチパック

公式webサイト

ランチパック 検索

公式Facebookページ  
www.facebook.com/lunchpack.jp

スマートフォン用アプリ **ランチパックCLUB** 検索  
[Google Play] [App Store] からダウンロード

## ヨーロッパ旅行なら、 そして、鉄道の旅ならレイルヨーロッパで！



## Enjoy Europe Travel by Train!

次の旅行は、ヨーロッパの鉄道に乗る、素敵な旅にしませんか？

レイルヨーロッパでは、ヨーロッパにおける各種鉄道パスおよび区間乗車券を取り扱っております。公式ホームページでは、それらがお手頃な価格で簡単にリアルタイムで予約できます。オリジナリティーあふれるあなただけの旅を、レイルヨーロッパはサポートいたします。

¥500 OFF

キャンペーンコード  
JYH500JPY

レイルヨーロッパのホームページでキャンペーンコードを入力すると10,000円以上のチケット・パスをご購入の方はもれなく500円割引！

【ご利用方法】2018年9月30日までにご予約いただいたチケットやパスの合計金額から割引となります。他のキャンペーンコードとの併用、または払い戻しはできません。キャンペーンコードをメモするなど控えて頂き、ご購入時にご利用ください。ショッピングカートの画面でキャンペーンコードを必ず入力してください。キャンペーンコードは変更/払い戻しの手続き後には適用されません。

その他、お得なキャンペーンも実施中！

レイルヨーロッパ

検索

Facebook





# Vision

Principle and Philosophy

## *Inclusivity*

世界を超えて

## *Learning and Understanding*

考えよう

## *Sustainability*

僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

※本紙の情報は2017年9月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。  
 発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会  
 編集・発行人 寺島 真  
 TEL.(03)5738-0546  
 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1  
 国立オリンピック記念青少年総合センター内  
 ※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。  
 制作・印刷製本/サンメッセ株式会社

## Line up

インタビュー ..... P02  
 映画監督/紀里谷和明  
 自分自身の「声」を、もっと聴こうよ。

Youth Hostel Pick up ..... P08  
 旅人の心の灯台を目指して  
 塩狩ヒュッテユースホステル

Hostelling Magazine × 地球の歩き方... P12  
 暗い国なんて、過去のもの!  
 ヨーロッパ屈指の観光大国へ  
 ポーランド  
 ■知ってた? ポーランドって、こんな国  
 ■ワルシャワ&クラクフからの1DAY TRIP

トリップアドバイザー Presents ..... P18  
 耳寄り! 観光NAVI  
 ワルシャワの人気バー&クラブ

教えて! 旅GIRL ..... P20  
 松島むうの晴れときどき旅びより..... P21

Event Information ..... P22

巻頭インタビュー

# 自分自身の「声」を、 もつと聴こうよ。

映画監督

紀里谷 和明

15歳で単身渡米し、  
全米有数のアートスクールでデザインや音楽、写真を学び、  
その後アメリカの美術大学へ進学したという経歴を持つ紀里谷さん。  
1994年からニューヨークを拠点に写真家として活動を開始後は、  
数々のアーティストのジャケット写真やミュージックビデオ、CMを手がけてきました。  
2004年には『CASSHERN』で映画監督デビューを果たし、  
2015年にはハリウッド製作の『ラスト・ナイツ』を発表。  
現在もアメリカで次回作の脚本の執筆活動をされているという紀里谷さんが  
今、若者に伝えたい「想い」とは。  
熱量たっぷりに語って頂きました。

## 人が本来持っている美しさを、 「こうしなければならない」が奪っている。

このHostelling Magazineの読者は若い世代の人が多いですよね？ 今、若い人たちにすごく伝えたいことがあって。

—ぜひお聞かせください！

僕はそもそも、自然界における、全ての生物が美しいと思うんです。例えば外に出ると、植物があって、猫や虫がいたりしますよね。それらは誰から指図されることなく、調和がとれた状態で生きているわけじゃないですか。すごく美しいことだと思うんです。人間もそうで、赤ちゃんや子どもは、どんな肌の色だろうが、どんな境遇の子だろうが、圧倒的に美しい。笑いたい時に笑って、泣きたい時に泣いて、怒りたい時に怒る。子どもの天真爛漫さは、それが自然な姿だから美しいんだと思うんです。

では、なぜ、この社会では、その美しい存在が成長と共にその輝きを失ってしまうのか？ それを自分なりに考えて、紐解いていくと、先進国の場合は幼稚園に入る辺りから、その変質が始まると思うんです。「どこの幼稚園に入んなきゃいけない、そのためにはこういう話し方をしなさい、笑い方をしなさい、歩き方をしなさい」というのが、この時期から始まる。子どもがどんどん縛られていって、その子がその子本来の姿であってはいけないという教育が始まる。

「今のままではだめ」「もっとこうなりなさい」という、親や社会が唱え続ける価値観によって、子どもの天真爛漫さが窒息させられてゆく。要は、社会という集合体において都合のいい人間になりなさいということですよ。社会が強制する、いわゆる「集会的意識」というものが、本来なんの問題もない素晴らしいものを歪めていく。歪められた結果、多くの人々が幸せとは程遠い状況に進んでしまっているのではないのでしょうか。

## コンプレックスなんて、 どうして持つ必要があるんだろう？

Q. 紀里谷さんの仰っている「幸せとはほど遠い状況」というのは、どんな状況でしょうか。

多くの人たちが「幸せになるため」と言いながら物質的なものを追いかけています。お金を稼いで、そのお金で買い物を買いますが、手に入れているものの多くは、本来であれば必要ではないものを必要と思わされて買っているだけなのではないのでしょうか。そのために、したくもない仕事を

しなければならない。なぜその仕事をするのですか？と聞くと、「食べていくため」と言うんですが、その多くは嘘で、必要でもないものを追いかけているだけなんです。この「必要でないものを必要と思わせる」という巧妙なトリックに絡め取られた人たちが、幻を追いかける。その構造で世界経済の大部分が成り立っていて、広がり続けているわけです。それはモノに限らずです。「注目されなければならない」「好かれなければならない」と、大人になっても、今のあなたではダメだと言われ続けているわけです。そんな状況だと、幸せどころか不安しかないと思いませんか？

Q. 紀里谷さんはなぜ、世の中の違和感から自力で抜け出すことができたのでしょうか。

親父の教育が大きかったと思います。「とにかくやりたいことはなんでもやっていい。どんな仕事をしてもいい。ただし、全部自己責任。お前が決めることだから、人のせいにしちゃ駄目だし、それでお前が路頭に迷おうが野垂れ死にしようが俺には関係ない」と、小学校に上がる前から言われていました。

多くの子どもは「より良い人生を歩むにはこの学校に入った方が有利」と、受験勉強を強制されます。確かに、世界は圧倒的な格差社会に突入していて、その構造の中で残っていくにはそうするしかない、という理屈もわかります。しかし、それって結局親の価値観でしかないですよ。子どもの幸せではなく、親の恐怖が子どもに投影されているわけです。

## 自分で考えて進まなければ、 何をしても「真実」は得られない。

Q. 15歳で単身渡米することを決めたのも、そういう価値観から外れたいという想いがあったからなのではないでしょうか？

「もうくだらな過ぎてやってられない！」っていう気持ちがあって、「ここから早く出なきゃ」とずっと思っていました。それも子どもの考えだから「ここから出れば楽園みたいなところがあるんだろうな」と思っていたわけです。確かに、アメリカでの高校生活には自由があって、日本で感じていたくだらなさは激減しました。例えば、なぜ校則で髪の毛の長さや服装が決められているのか。それって学習することとなんの関係があるんだろうって思いませんか？ たかだか数ヶ月の出生のタイミングの差で上級生・下級生に分けられて、どっちが偉いとか、下級生は上級生に敬語を使わなきゃいけないとか、馬鹿じゃないのって思いませんか？

アメリカに行って、そういったストレスはなくなったけれど、

時間が経つにつれて、その国の矛盾点もだんだん見えてくるんですね。思考停止した無知な社会が押しつけてくる無意味な価値観。結果、どこに行つたって同じなんだなと思いました。だから、僕は社会というか集合体を信じていないし、国家というものも信じていない。肩書とか、団体とか、名前がついているもの全てを信じません。自分で見て、判断するだけでいいと思う。

—それにしても、15歳という若さで海外へ飛び出してしまう行動力が凄いと感じます。

そもそも、僕、「海外」だとか「留学」だとかいう言葉自体に違和感を覚えるんです。だって、たかが100年前の日本では、土佐だ長州だ江戸だと言って争っていて違う国だったわけですよ。それが今では、高知と山口と東京でしょ。今は中国が〜とか、韓国が〜とか言ってるけど、たぶん100年後に振り返ったら「昔の人たちは何言っちゃってたの?」というレベルの滑稽な話だと思うんです。線引きをして、外国がどうのこうのっていう話をする事自体がナンセンスで、現に、自分の祖父が70年前に戦争をしていた国に僕は住んでいて、そこからインターネットを使って世界中の人と繋がって一緒に映画を作っているわけですよ。国境という人間が決めたわけのわからないものがあるから、それを乗り越える乗り越えない、というハードルが設定されてしまう。海外なんて行きたきゃ行けばいいし、行きたくなかったら行かなきゃいいんです。大学に通うかどうかもそう。社会人という言葉もそう。なりたきゃなればいいし、違う道を歩きたければ歩けばいい。どっちが得とか有利とか、何かになるとかならないとか、僕からすると「何言ってんの?」って話です。最初にも言ったように、自然に生きているものは何一つそんなこと考えないのです。それでいて美しいんです。

—きっと、多くの人はそこから外れることで周りに何か言われるのでは、という恐怖心が強いのでしょうか。

一人ひとりがちゃんと考えていない、「周りがやっているからそうしましょう」という思考停止状態。それが僕から見ると、すごく滑稽であり、危険だと思ってしまう。例えば、北朝鮮のマスゲームを見ていて多くの日本人は異様に感じると思うんです。「なんで、あんなことしなくちゃいけないの?」と。勿論、強制的にやらされている人たちもいるんですが、「みんなやってるから、やるものなんだ」という人たちがほとんどだと思うんです。戦時中の日本人もそうだった。B29に対して竹槍の訓練をするとか、全く同じ思考回路ですよね。異様に思いませんか? それは北朝鮮、日本に限らず、世界中でそうなんです。他の国のことだと滑稽だと馬鹿にするくせに、自分

の国の滑稽さは当たり前になっている。不思議ですよ。

たぶん、こういうことを言ったって理解してくれるのは、このインタビューを読んだ人の1%もいないと思う。でも、それでもいいんです。100人に1人でもいいから、「ちょっと待てよ、俺、今何やってんの? これって実はおかしくない?」って思ってもらえたらいい。留学しようと思っているのは、本当に自分がしたいと思っているからなのか? 第一志望の大学や会社に、自分は本当に行きたいのか? 何故行きたいのか? 買おうとしているモノは、本当に自分が好きだから買おうのか? それとも流行っているから買おうとしているのか? そもそも自分はどう生きたいのか? 一回自分で考えることをしない限り、何をしようがそれはあなたにとっての「真実」ではないんだと思います。

## もっと、自分自身の「声」を聴こう。

Q. 今までのお話の流れをまとめると、「もっと自分自身の声を聴け」……ということでしょうか。

それ以外の何があるんでしょうか。それをやらないから、この世界ではこんなに混乱が起きているのではないのでしょうか。歴史上で起こった残虐行為と呼ばれているものは、自分の声を聴かなかった人たちが起こしていることです。「国が違う」という理由で爆弾を落としたり、「人種が違う」という理由で、その人たちをガス室に送り込んだり、自分自身の声を聴けば、「この人たちを殺すのっておかしくない?」って普通は思いますよ。それが「国のため」とか「組織のため」という理屈で、平気で人を殺し、略奪を行う。今でさえ、「自国」の繁栄のためという理屈で、どれだけの「他国」の人たちが奴隷労働に従事させられ、彼らの資源が搾取されていることか。身近なところでは、どれだけのサラリーマンが「会社のため」という理屈で人間性を欠いた行動をさせられて、その結果苦しんでいる人たちが大勢いることか、狂っています。繰り返しますが、本来、私たち人間も含めた全ての生き物は美しいはずなんです。それなのに、あらゆるものに名前をつけて、分割して、優劣をつけて、所有して、争っているのが人間なんです。そんなことをするのは人間だけなんです。自然界の全てにはそもそも名前すらないのです。国境なんて存在しないのです。所有できるモノなんかありません。何も誰のモノでもないんです。そこに気づけば、圧倒的な可能性が広がって行く。そもそも自由なんだということに気づく。自分に押しつけられた無意味なレッテルなんか剥がしてしまえばいいんです。自分の可能性を制限する必要なんかありません、自分の思うように自由に生きていけばいいんです。

## 圧倒的に違う状況に身を置くと、 新しい気づきに出会える。

Q. 紀里谷さんは旅をしたり、海外生活を経験することで  
んな気づきを得てきたのでしょうか？

僕がすごく重要だと思うのは、「状況を変えることによって“違い”が見えてくる」ということです。違いが見えない限り、気づけないことがとても多い。ただ、すごく危険だと思うのが、「留学さえすればいい」という考え方。僕が若い頃に多かったのは、「留学する＝箔がつく」みたいな人たちで、「ケンブリッジ行ってたんです」とか、「アメリカに留学してたんです」って、留学したことが付加価値というか肩書みたいになっちゃって、それで満足しちゃっているような人たち。それって全然本質的じゃないですよ。「フェラーリ乗ってます」みたいなことと変わらない。

旅行だろうが留学だろうが移住だろうがどうでもよくて、「そこで違いがわかる」ってことがすごく重要。でも、それはこの国にいてもできることです。例えば、自分がどこかの市の、いわゆる普通のマンションみたいなところに住んでいます。それで、極端だけど、もしも同じ市内でホームレスとして生活してみるってことをやったら、差異が見えてくるわけです。地理的状況じゃなくて、自分を圧倒的に違う状況に置いて視点を変えてみることによって、「こんなに違うのか」とか、「こういうことだったのか」という発見が必ずあるはず。「俺ってすごくいい生活してたんだな」とか、「俺ってすごいつまんねー生活してたじゃん」とか。

世の中には好きなモノが自由に買えるお金持ちの人たちがいますよね。それはそれで別にいいんだけど、でも、そればかりやってる人たちってめちゃくちゃつまんないですよ。逆に、「俺、コンビニの弁当しか食わないんで」って思ってる人たちもめちゃくちゃつまんない。

仮に、コンビニの弁当しか買えない経済状況だとするじゃないですか。でも、そういう人たちって、時々居酒屋にも行ったりしているわけですよ。じゃあ、毎回居酒屋に行くのもいいけど、10回我慢して1回でいいから人が言うところの「高級」だと呼ばれているものを食べてみる。食べてみて、「なんだ、言われているほど美味しくねーじゃねーかよ」と思ったら、ものすごい収穫ですよ。逆に「こんなに美味しいものがあるんだ!」と思えるのも収穫ですよ。同じように、毎日5万円の食事をしてる人がいるとして、コンビニのおにぎりを買って見たら同じことが起きるわけですよ。「こんなに美味しいのか」とか「なんだ、まずいね」とか。なんでもいいんだけど、それがすごく重要で、それをやらずに曖昧に過ごしているような、灰色の人たちが多い気がします。



### Profile

## 紀里谷 和明

1968年、熊本県生まれ。15歳の時に単身渡米し、マサチューセッツ州にある全米有数のアートスクールでデザイン、音楽、絵画、写真などを学び、パーソンズ美術大学では建築を専攻した。ニューヨーク在住時の1990年代半ばに写真家として活動を開始。その後、数多くのミュージック・ビデオを制作し、映像クリエイターとして脚光を浴びる一方、CM、広告、雑誌のアートディレクションも手がける。

SFアクション『CASSHERN』(04)で映画監督デビュー。アドベンチャー活劇『GOEMON』(08)を発表。監督第3作『ラスト・ナイト』(15)でハリウッド・デビューを果たした。



## 標高1,500mでの意外な暮らし。

Q. 現在はアメリカに住んでいらっしゃるそうですが、どんな生活をされているのか気になります。

ロサンゼルスから車で2時間くらいの、標高1,500mの山小屋に住んでいます。6月なんて、玄関を開けて外に出たのは5日間もなかったんじゃないかな。基本的に用がなければ家から出ないです。お風呂に入って歯を磨いて筋トレをして、何時から何時まで脚本を書く。食事や休憩の時間も、全てのスケジュールが決まっています。

Q. その生活を半年続けているのですか？

はい。もちろん休む時もありますが、だって、この“ものづくり”っていうのは、頑張ったからできるわけでもないですから。悩んだり、放棄する時もあります。ただ、単純な話、社会と関わりたくないっていう気持ちはすごくありますよね。こういうことを言うと非難されそうだけど、僕、引きこもりの

子たちの気持ちがわかるようになったんですよ。引きこもりってネガティブなニュアンスで伝えられますが、よくよく考えると彼らが一番まともなのかなと思う時があります。冷静に見てみると、「社会」と呼ばれているものの中で行われていることがおかしいと、純粋な若者だったら感じると思います。ただ、幸いにも、自分には違う選択肢が与えられたけど、それすら与えられない子どもたちがいっぱいいるわけじゃないですか。社会が狂っていたら家にいますよね。

Q. もしも紀里谷さんが当時アメリカに行くことを反対されていたとしたら引きこもりになっていましたか？

たぶん、家出をしてでも行っていたでしょうね(笑)。バイトして渡航資金を貯めるでも、なんでもいいんだけど、行動をしていたと思う。その時、「どんな状況でも俺は生きていける」という確固たる自信がありましたから。

—「やらずして『できない』と言うな」の精神が、当時から紀里谷さんを動かしていたのですね。

## 情報は、自分の足で、 五感で、魂で手に入れる。

Q.「社会と関わりたくない」という想いがある一方で、作品を作って世の中に発信していくというのは、ある意味で相反している部分もある気がするのですが……。

シンプルに、ものが作りたいただけなんです。もちろん、写真・映画を始めた頃は、「売りたい」とか、「お金儲けしなきゃいけない」とか、「この雑誌の表紙やりたい」とか、「興行収入何億円の映画を撮りたい」とか、そういう気持ちがありました。けれど、そっちが主の感情になってしまうと、そこには本当に苦しみしかない。そうじゃなくて、「そもそもお前は何かしたかったの?」って話になってくると、単純に「俺はただ、ものが作りたかっただけなんだ」という結論になります。別に映画でなければいけなかったわけでもないし、写真でなければいけなかったわけでもなくて、何か作りたかっただけなんです。映画や写真がない200年前に生まれていたら絵を描いていたでしょうし、詩を書いていたかもしれないし。ただ、そういった衝動的な創作意欲を「職業」という肩書きが超越していくわけです。それで苦しんでいる人たちが今の世の中ほとんどではないでしょうか。

Q. となると、紀里谷さんにとっては作品を作ることがゴールなのでしょうか?

見た人が喜んでくれたら、それに越したことはありません。でも、「喜んでもらうがためにやる」というのはサービス業ですよ。やっぱり、そこには自分の内側から湧き出る衝動があって。それは人それぞれだと思うんです。山を見て登りたいと思う人は、理屈もなくそう思うでしょうし、恋人が好きだっていう感情も理屈も何もないわけですよ。それと同じことじゃないですか。その衝動を、人はないがしろにしていると思うんです。僕の場合は、「こんなの作りたいな、凄いだろうな」ってなんの根拠もない、非常に曖昧で抽象的な衝動がものづくりの根源で、それを見てくださった方々が「よかった」と喜んでくれると、それに越したことはないけど、そこがすり替わられて「売ればいい」になってくるわけですよ。そうじゃなくて、作品も、このインタビューも、見てくれた人たちの99%が「意味わかんない」と思っただとしても、1人の人間が今まで感じなかったものを感じてくれたらいい。そういう人に届けばいいし、僕はそれしかできないと思っています。

紀里谷和明さん監督作品

## 『CASSHERN』『GOEMON』 『ラスト・ナイツ』

抽選で**3名様**(各作品1名様)に  
プレゼント!

ご応募は日本ユースホステル協会  
ホームページの専用お申込みフォームから!  
<http://www.jyh.or.jp/hm/>

○ 応募締切 2017年11月末日

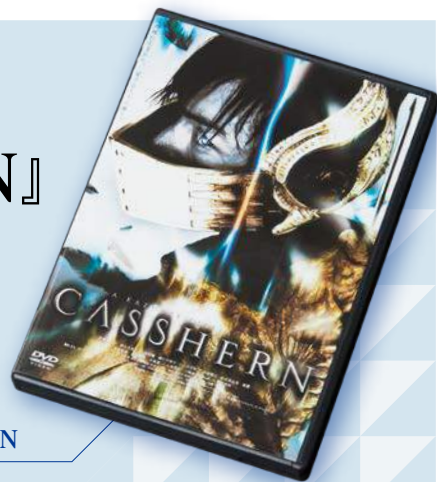
※なお、当選発表及びプレゼントの作品は、  
商品の発送を以てかえさせていただきます。

紀里谷和明さん  
直筆サイン入り  
映画DVD

CASSHERN

GOEMON

ラスト・ナイツ





## つづきをダウンロード(無料)



HostellingMagazine vol.10  
まとめてダウンロード



トリップアドバイザー Presents ..... P18  
耳寄り! 観光NAVI  
ワルシャワの人気バー&クラブ



インタビュー ..... P02  
映画監督/紀里谷和明  
自分自身の「声」をもっと聴こうよ。



教えて! 旅GIRL ..... P20



Youth Hostel Pick up ..... P08  
旅人の心の灯台を目指して  
塩狩ヒュッテユースホステル



松島むうの晴れときどき旅びより ..... P21



Hostelling Magazine × 地球の歩き方... P12  
暗い国なんて、過去のもの!  
ヨーロッパ屈指の観光大国へ  
ポーランド  
■知ってた? ポーランドって、こんな国  
■ワルシャワ&クラクフからの1DAY TRIP



Event Information ..... P22